

第 26 回日大分 NST 研究会を終えて

平成 30 年 1 月 20 日の土曜日、快晴の新春の日に第 26 回大分 NST 研究会を大分市ホルトホールにて開催させていただきました。例年、冬の回では参加者が少なくなるとのことでしたが、245 名の方に参加していただき安堵しました。特に今回は医師参加者が 33 名と近年では最高数となったことが特徴であり、これを機会に医師の NST に関する意識が高まれば会の企画者として光栄な事と存じます。さらに会後の懇親会でも、これまで以上の皆さんに参加していただき、急遽、当初の企画場所から変更しなければならないという嬉しい、誤算もありました。

一般演題に関しましては締め切りまでの応募は 4 題と少なかったのですが、昨年 11 月 3 日に開催され、私も参加させてもらった Waves Japan@別府での活動報告を企画内に入れたかったため締め切らせていただきました。しかし、数は少ないものの臼杵市コスモス病院の長吉先生からは日常臨床ですぐに役立つ透析前後での垂鉛濃度の変化をご提示いただき、敬和会岡病院の榎田先生からは病院から在宅までの栄養管理情報伝達の重要なテーマをご提示いただきました。大分市医師会立アルメイダ病院の板井先生からは今、注目の人工臓器での血糖管理をご提示いただき、大分大学の栗林先生からはビタミン C 補充の重要性をご提示いただき、両テーマとも重症患者のホットなテーマであり、今後の研究の進展が期待されました。

特別企画としては、今回の目玉でもある Waves Japan@別府での活動報告を国家公務員共済組合連合会新別府病院の田崎先生から講演を頂戴しました。単に医療機関での栄養療法のみでなく、「元気に食べていますか？」との市民への声かけから栄養療法を予防医学の一つとして考える画期的活動と思われました。私、自身も参加させて頂きましたが、地道に市民へ栄養の重要性を学術的にも伝えるという意味でさらに活動が広がる事が期待されます。教育講演として自身で栄養療法とノーベル賞と題して、2016,17 年と医学生理学賞を受賞したオートファジー、体内時計のメカニズムの解明はどちらも栄養療法との結びつきがあります。学問としては一見地道に見える栄養療法も勉強し続ける心を持つことが肝要であると考えています。

特別講演として名古屋大学大学院医学系研究科 救急・集中治療医学分野教授の松田直之先生にお越し頂き、「重症患者の栄養管理—基礎から臨床へ—」をテーマにしてお話頂きました。重症患者、特に炎症のある患者さんでは呼吸循環だけでなく、早期から経腸栄養、特に 6 時間以内に開始することで名古屋大学では予後も改善できていることをご提示していただきました。腸を使用することで炎症も制御でき、重症患者さんの管理にはバンドルを用いて計画的に栄養療法を実施することの重要性をバンドル内容毎に基礎データも用いて提示していただき、参加していただいた皆様には明日から使用できる内容であったのではないかと思います。出席者からの御質問も多かったのですが時間の都合で締め切らせていただき、申し訳ありませんでした。会終了後の懇親会にも松田教授にはご出席いただき、多くの先生方のご質問に対しても笑顔で

かつ幅広い知識で答えられていたのが印象的でした。ただやや残念なのが多くの出席の方々から御講演のハンドアウトの要望があり、松田教授にお願いし頂戴して、世話人会宛てにメール差し上げたのですが、どなたからもご返事はいただけませんでした。

最後になりましたが、事務局を初め、ご協力いただいた協賛の大塚製薬工場の皆様、当院のスタッフの皆様のおかげで無事に本研究会を終えることが出来ましたことに厚く御礼申し上げます。

第 26 回大分 NST 研究会

当番世話人 大分市医師会立アルメイダ病院

副院長 岩坂日出男